

『食べられるよろこび!』は健康な口腔環境から、『食べるよろこび!』は美味しい食べ物から!

美味しさを創り出す専門家である、キューピー研究所所員の皆様と健口を担う我々が、互いに手を取り合い、この分野から国民の口福人生に貢献するため、情報交流の場が設けられました。



当学会からは、『命の入り口、食べることは生きること』の命題のもと、



1 「あなたはあなたの食べたものでできている」と題して夏見良宏先生が、生を受けてから一生を終えるまでの経年を通しての食の果たす役割／効果についての当学会の取り組みについて説明があり、

引き続き、2 「口は命の入り口 食べることは生きること 小児編」を増田純一先生が、3歳までの味覚の経験、口腔内の管理、食を通しての機能を会得することが、その後の身体の 成長／形成に重要な意味をなすことを実例を挙げ提示され、



3 「口は命の入り口 食べることは生きること 高齢者編」を河原英雄先生が、一度失われた身体的機能が、咀嚼を通し脳の活性化を得ることにより、回復する可能性が大きいことを、実際の症例を通し提示され、



最後に、4 「口は命の入り口 食べることは生きること 解説編」を上濱正先生が、2、3で提示した内容が、顎口腔機能と脳とが、いかに密接に関わり機能回復していくかを、科学的根拠をもとに解説。薬物療法の限界、咀嚼の持つ大きな意義について説明され研究員の方々の深いうなずきをもって終演と成りました。



鈴木豊相談役をはじめとする社員の方々、研究者約130名が聴講され、4時間弱に及ぶ時間は、アカデミックな緊張感あり、時に笑いあり、感嘆のため息あり、最後には感動の涙ありの実に有意義な時間が創り出されました。

生を受けた瞬間から始まる「食」、そして一生を終えるときまで『食べるよろこび』をいかに多く感じるかにより、「……人生」の…にどのような形容詞が付くのかが決まると言っても過言ではないと思います。

キューピー府中研究所は、多摩川から吹き付ける寒風で“春まだ遠し”を感じさせましたが、講演会場には、確実に“新たな風”が吹きはじめ、歯科界の春を予感すると同時に、思わずつぶやきました。

“俺たちに明日はある”